

〔対話録〕

谷川俊太郎との対話——「安らぐということ」——

宮 崎 真 素 美

これは、愛知県立大学「不安と生の研究会」による企画「不安」から照らす「生」の諸相——ことば・こころ・肉体……」の初回ゲストに谷川俊太郎氏を迎え、本学学術講演会「詩人を招く 安らぐということ」としておこなった「不安」と「安らぎ」をめぐる八十五分間の対話である。

■不安はダイナミック

（笑）

宮崎 私が僭越ながらお相手を務めさせていただきます

ので、よろしく願います。

谷川 よろしく願います。

宮崎 まず、愛知県との縁は、お父さんの徹三さんが

常滑で。

谷川 常滑生まれで。愛知五中とかね。

宮崎 五中なんですか。今の瑞陵高校ですね。

谷川 そうです。

宮崎 ようこそおいでくださいました。

谷川 こちらこそ。

宮崎 ありがとうございます。

今日は谷川さんが対話形式をご希望ということで
すので。

谷川 というより、僕は講演ができないということ。

宮崎 そのご出身なんですね。

谷川 はい。

宮崎 この長久手辺りはおいでになったことはおありな

んですか。

谷川 あるかもしれないけど、覚えてません。

宮崎 本日はどんな印象でいらっしゃいますか。長久手

にお着きになった感じ。

谷川 だって、高速道路で車で来たから。(笑) 他んと

こと全然変わんない感じですよ。

宮崎 周りに何もなかったところ。緑がもくもくと今、き

れいになって。

谷川 だけど、万博みたいなもの、やったんでしょう？

この辺で。

宮崎 そうですね。この向かいの愛・地球博記念公園

は、それをまさに記念した公園ですね。

さて、今日は谷川さんとの約束事が一つありまし

て、楽しい会にする、ということでしたかね？

また、私がお話しをする中で、「学生」という言

葉が結構出てくると思います。これはもちろん本

学の学生のことですが、このとなりにあります本

学図書館で、今日

の講演会とタイ

アップでおこなっ

ています企画展示

で意見票をもらっ

た、その学生。そ

して、私が今、担

当している国文学

各論、これは専門

の授業ですが、こ

れも今日の講演会

とタイアップで谷

川さんの詩を扱っておりまして、その受講者た

ち。この二つに関わる人たちを指して主に「学

生」と言ってまいりますので、よろしく願いい

たします。

早速その学生からの要望です。先ほどお着きに

なつてすぐに谷川さんを図書館へお連れしてしま

いましたが、そこでの展示をご覧になった感想を

ぜひお聞かせいただきたいと思います。いかがです



か。

谷川　　すぐ「不安」になりましたね。

宮崎　よかったです。(笑)

谷川　よかったですか。(笑)

宮崎　「不安と生の研究会」ですからね。

谷川　僕はアカデミックな世界と普段全然接触がないわけですね。私及び私の本なんかがずらりと並んでいて、皆さんがそれを研究なさっていると聞いただけで、もう「不安」になるんです。(笑)

宮崎　本当ですか。そういう「不安」ですか。

谷川　だって、自分はそのような研究されるだけの値打ちがあるんだろうか、みたいに思いますよね？

宮崎　そんなことはありませんけどね。

谷川　そうなんですか。(笑)

宮崎　ええ。そんなことはありません。だから、今日谷川さんに来ていただいたんですね。

この「不安」と「生」というのは本当に難しいテーマだと思うんですね。谷川さんと打ち合わせでお電話しているときも何回かおっしゃいましたね？「そんな難しいこと」って。

谷川　難しい。要するに研究対象にはならないと僕は基本的に思っているわけですよ、「不安」というのは。心理学とか、社会学とかでいろいろ言えるんじゃないけど。

「不安」という漢字・漢語で対象化されると、なんか現実の「不安」とは違うものになるって感じがすごくしますね。

宮崎　なるほど。そうかもしれませんね。それはすごく実感としてありますね。

谷川　でしょう？　だから僕、今日話すんだったら、自分が今、何を「不安」に思っているかというところから始めたほうがいいのかなと思ってただけだ。

宮崎　そうですね。じゃあ、ぜひ今、「不安」に思っていること。

谷川　駅の階段下りるのが「不安」なんです。ここ数年、足が弱ってきてるわけ。年とって。で、上るほうはいんだけど、下るほうは手すりがないと「不安」なんです。」「不安」なんです。

谷川

はい。それがまず、プライベートな「不安」。

プライベートな「不安」以外にパブリックな、パブリックな「不安」もあって、これはやっぱり地球の未来がどうなるんだろう？ ということですよ。社会的にはもちろんテロとか、環境保全とか、いろいろあるんですけども、天文学的にも地球はもしかするとそろそろ寿命が来てんじゃないかと、そんな「不安」もあります。

けど、これはあんまりそんなに強くない「不安」なんです。パブリックな「不安」は。新聞なんかでみんないろいろ言ってるし、みんなも共有してるから。だから、階段下りるほうがはるかに「不安」ですよ。（笑）

宮崎

やっぱりご自分の身体性のほうがね。

谷川 そうなんです。「不安」は常に身体を伴っていますよね？

宮崎

そうですね。だから、私たちも今回のテーマを「ことば・こころ・肉体…」としてまして、まさにその肉体ということですよ。

谷川

そうですね。

宮崎

それはすごく大事な、私たちに密着した、離れていけない「不安」ですよ。

谷川さんにこのテーマを投げたとき、即座に「安らぐということ」をテーマに挙げてくださいましたが、それはどういうわけだったんでしょうね。

谷川

「不安」がないほうがいいんだもの、簡単に言え。（笑）

宮崎

そうですね。

谷川

研究する前に「不安」をなくしちゃいたいという感じが強いから、じゃ、反対は何かというと「安らぐ」ということで。

「安らぐ」のはどういうときかというと、多分母親のおなかの中にいたときが一番よかったんじゃないかというのはありますよね？ みんなあると思うんです、それは。

宮崎

そうですね。記憶があるよう……、ないかもしれない。

谷川

意識的な記憶はないでしょうね。完全に意識下のものだから。だから、本当に体の記憶であって、理性とか、そういうものの記憶……

(うしろのスクリーンを振り向いて) 自分の顔が

こんなにでっかく見えてるの、「不安」だね。(笑)

宮崎 「不安」ですよ? これ。

谷川 どうしてあなたの顔は出てこないの?(笑)

宮崎 いや、私は……。 (笑)

谷川 こっちも映してくださいよ。

宮崎 それはいいですよ。私もリハーサルのときにそ

ちらへ座って、恐ろしくなりましたね。(笑)

谷川 なんかファシズム? 全体主義、ヒトラーかなん

かがいるみたいなんです。(笑)

宮崎 いや、そんなことない。すてきですよ。どうか気

になさらないで。

谷川 後ろなんか見ないけど。

宮崎 どうか気になさらないで。

谷川 気になりますよ、やつぱり。

宮崎 なんだか背後、嫌ですよ?

谷川 うん。

宮崎 ええ、分かれますわ。我慢してお願いします。

(笑) すみません、我慢ばかりさせてしまって。

学生からも、今、ちょうどお話しいただいた、谷

川さんにとって「安らぐ」とはどういうときかと

いう質問が来ていて、この質問をしてくれた人は

「不安」なときほど言葉が出てきちゃうと言って

るんですね。

谷川 そうかもしれませんね。

「不安」をテーマに、隠されたテーマだけど、詩

なんか書くことありますよね? あるいは、誰

かが書いてますよね? それを「不安」な気持ち

で読み始めると、その詩がよければ、「不安」

じゃなくなるんですよ。「不安」を表現したもの

がよいものであれば、それは「不安」を呼び起こ

さない。むしろ「安心」させてしまう。そこに芸

術表現の一つの秘密があるなと思いましたけど。

宮崎 やりにくくなってきたんですが、学生たちにタイ

アップの授業で、「谷川さんの詩の中で「安心」

と「不安」、それぞれ選んで」と言ってるんです

よ。(笑)

谷川 あ、ほんと。

宮崎 「不安」を感じてる詩もあるんですけど、学生た

ちもすごく正直で、きちっと分別できないと言ひ

ますよね。

谷川 そうでしょうね。

宮崎 もちろんそうだと思いますね。

谷川 ほんとにダイナミックなんですよ、「不安」というのは。

宮崎 「不安」と「安らぎ」、あるいは「安心」は、やっぱり双子なんですよね。

谷川 混じり合ってますね。

宮崎 そこはすごく正直に、後でお話しますけども、出てきています。

一つの詩でも「不安」と「安心」が分かれていますね。人によって。

谷川 あ、そう。なるほどね。

宮崎 そうです。私にとっては意外な詩が出てきますので、後でちよっとお話をさせていただければと思います。

■詩「とんでもないこと」

宮崎 この会場の入り口のところと図書館展示のところ

にも掲示してありますけれども、谷川さんがこの

企画に向けて「とんでもないこと」という詩をプレゼントしてくださいましたよね？

谷川 はい。

宮崎 そこから入っていきたいと思います。

ちよっとお待ちくださいね。私、このプロジェクターの操作、昨日猛練習したんですよ。（笑）

谷川 あ、ほんと。

宮崎 たった一人で、ここで。

今日はこんなたくさんの方が集まってらっしゃるとは思わなかったから、びっくりしちゃいました。

宮崎 私ものです。九百人いらつしやいます。お断りした方も百人ぐらいいらつしやるそうですよ。

谷川 あ、ほんと。なんでそんなに集客力があるんですか。（笑）

宮崎 谷川さんだからですよ。

谷川 そんなことない。詩の朗読会なんて大体三十人もくれば普通ですよ。

宮崎 そんな、まさか。今日は一席一席が大事なんです

ね。だから、ご都合のつかなかった方はわざわざ欠席届をスタッフの方に。他の人にお譲りください、と。

谷川 え？　なんか点数がついたりするんですか。

宮崎 いえいえ。そんなことも初めてだとスタッフの方はおっしゃってました。

はい、映りました。これが谷川さんがくださった詩ですよ？

谷川 はい。

宮崎 じゃあ、すみませんが、お読みいただけますか。僕の記憶では、この企画を伺ってから書いたわけじゃないんです。既に書いてあったんですよ。

(笑)

宮崎 ほんとですか。ちよつとショックですね。(笑)

谷川 どうしてショックなの？　それほど「不安」というのはある、既にもう存在してるということだし。だから、この詩があつて、この企画が出たというの、ああ、なるほどな、みたいな感じでしたよね。

宮崎 そうですね。私の言ってるショックはネガティブ

なショックだけじゃないですね。

谷川 そうですよ？

宮崎 それはすぐうれしいですね。

じゃあ、お願いします。

谷川 「なんでもないこと」。

宮崎 あ、「なんでもないこと」です。(笑)

谷川 駄目？　「なんでもないこと」のほうがいい？

いいですよ。もう今や、「なんでもないこと」ですよ？(笑)

谷川 いや、ちゃんとまじめにやりますね。(笑)ちゃんと反応してくれたから、うれしかったです。

(笑)

とんでもないこと

なにかとんでもないことがおこりそう

なにがおこるのか

じしんじゃない

せんそうじゃない

宮崎

どうも。(拍手)

幸せでした、これが伺えて。どんなふうに谷川さ

だれかがしぬのでもない

ちぎゅうがほろびるのでもない

でもこわい

なにかとんでもないことがおこる

きつとおこる

きょうじやない

あしたでもない

でもいつかおこる

おこるといったいどうなるのか

しんばいするのはいやだ

とんでもないこと

おこるのならおこればいい

おこつてみる

いつだっていい

おこつてみる

おこればもうこわくない！

谷川 宮崎

ぜひ、はいはい。

それから谷川さん

とまたお話をしたいと思うんです。

(スクリーンに「意見票」を映して) まず、図書館の意見票から。意見票はこういう形にしています。

「ご意見をどうぞ。谷川俊太郎さんに聞いてみたいこと、この展示をご覧になった感想などを

お寄せください。このコーナーに掲示しますのとともに、講演会で紹介をさせていただきます。」

そうすると、うちの県立大学の学生は、びっし

谷川

あ、ほんと。

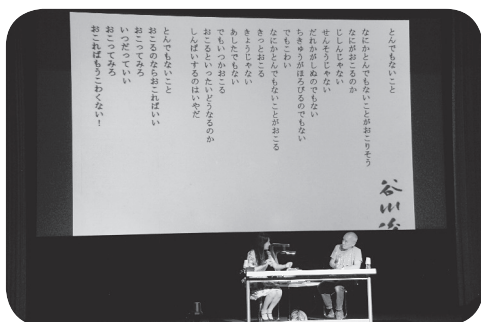
宮崎

ええ。せっかく読んでいただきまし

たので、ちょっと

学生の意見を紹介

して……。



谷川
宮崎

り、こんな感じで。

ちよつとびつくりしました。

これ、谷川さんにお送りしましたよね？　こういう感じで書いてきてくれて。

この人の意見、少し長いんですが、とても面白いので、皆さんにはスクリーンで谷川さんの詩をご覧いただきながら、私がこの人の意見票を読みあげていきますね。この人はこう言っています。

「図書館のゲートをくぐり、すぐ目に飛び込んできた詩「とんでもないこと」に何よりもまず打ちのめされました。すべてひらがなで、まるで一人の少年がその手に余る大きな事柄をどうにか自身の言葉にして叫んでいるような詩。「なにがおこるのか　じしんじゃない　せんそうじゃない」「きょうじゃない　あしたでもない」と具体的なものを否定していった後の「でもこわい」「でもいつかおこる」。端的でありながら、その言葉は日頃感じている、よく分からないが、確かにある漠然とした「不安」を呼び起こし、揺さぶってきました。そして、「とんでもないこと」と題名の

谷川

ことばで区切られ、始まる二連目では、「おこるのならおこればいい　おこってみろ　いつだっていい　おこってみろ！」と執拗に繰り返される呼び掛けから、逆におこってしまうことへの強い畏怖が感じられ、「おこればもうこわくない！」とまるで言い聞かせるかのような響きに「不安」の大きさ、恐ろしさを見る思いでした。しかし、その一方で「不安」にさせる何かに対し、挑むように投げかけられたその言葉には、恐ろしいものを乗り越えていこうとする力強さも感じさせられました。」

いかがですか。こういった意見。すぐくちやんと読んでくだすつてると思います。全部ひらがなで書いていることを問題にしてくれる学生もいるんですけども、僕は詩を書くときに、詩の中の一人称は、イコール自分自身だというふうには書いてないんです。その中の私とか、僕とかは、簡単に言ってしまうえば、フィクションで、自分から離れたものである。フィクションだけれども、そこにどうしても自分自身が反映されてる

とっていて、この詩もやはり、彼か彼女が書いてくれたように、一人の少年の立場で書いてますね。

子どもたちを読者対象にするときにはひらがな表記で書くことが多いですね。そのほうが難解な外国語的な、漢語的な表現をしないで、子どもたちの心に入っていけることがあるから。

この詩もそういう形で書いたものがたまたま今度の企画にぴったりだったということなんです。

そうでしたか。学生たちもそういうことを感受してるんですね。

谷川

と思います。

宮崎

この人だけではなくて、他にも同じようなことを言ってる人がいるので紹介しますと、「幼さを想起させるような書き方で、えたいの知れない「不安」がある」と。

こういうことを言ってる子もいましたね。「自分の中の少年を呼び起こしてくれる」と。

谷川

うんうんうん。

宮崎

ひらがなは汎用的な一般に開かれた感じがするけ

れど、しかし、学生たちは面白いことに、読み手の個性に染まってくると言いますね。

なるほどね。

谷川

つまり、自分が受け止めて、それが自分のかつての原初の形であるとか、少年性、少女性みたいなものを呼び起こしてくれると。

無名性と言った子もいます。「これがどんな人の口から出てもいい。まるで神の言葉のように。どんな人の口から出てもいいというのがひらがな詩としてはあるんじゃないか」と。

谷川

なるほど。

宮崎

あと、先ほどおっしゃっていたように、「ひらがなは現実的でない詩の言葉としても機能するんじゃないか」と言っていました。

それもありますね。そういう機能もありますね。

谷川

「密着するのではなくて、少し離して、詩の言葉としての成立ということを面白く浮き上がらせるんじゃないか」と言っていますね。

これもぜひ紹介したいのですが、本人から名前を紹介しても良しとのことですので、国文三年生の

白井さんという女の子です。「この詩を図書館に入っていったときにパッと見た」と。そして、

「これは谷川さんからのプレゼントですよ」という私が書いたパネルを読んだ。「谷川さんが今日の日、この六月四日のことを「とんでもないこと」、僕が来るのは「とんでもないこと」だよとあらわしたことにびっくりしちゃった」と言っていましたね。

谷川

そういう発想は全くないですからね、僕には。(笑) なんでそんなふうに考えてるんだろう？ 感じるんだろう？

宮崎

みんなそれぞれの受け止め方があるので。びっくりしたと。彼女は、谷川さんがいらっしやることがやつぱり「とんでもないこと」だと思っただけでしょうね。だから、反射したんだと思います。

谷川

マスメディアがつくった虚像みたいなものにだまされてるわけですよ、みんな、簡単に言えば。

(笑)

宮崎

白井さん、お席で聞いていらっしやいますかね。でも、ほんとに純粹にびっくりしましたね。か

わいらしいくらい。「びっくりしちゃいました」って。

谷川

例えば小学校なんか行くと、「あ、生きてる」と。(笑) 教科書なんか載っていると、みんな自分とは遠いところにいる人みたいに思うんだよね。

宮崎

そうですね。教科書は写真も一緒にパッと入るので、もう活字の中の人という感じかもしれないですよ。

谷川

そうですね。それは当人にとっては「不安」ですよ。(笑)

宮崎

「不安」でしょうね。

谷川

自分のイメージがどんどんインフレーションを起こして、みんな何感じてるんだろう？ みたいなね。

宮崎

谷川さんに、今回の講演ポスターを作るときに「どんなお写真がいいですか」と申し上げたら、「もうそんなの、ネット上に出てどんなのでも結構です」とおっしゃいましたよね？ もうそのくらいの感じなんですか。

谷川

全然ほら、役者じゃないから、顔で勝負してないから。(笑) 活字で勝負すればいいんだろうと思ってますけど。

宮崎

「詩」ですものね。

そして、やっぱりひらがなは身体的だということ
をすごく……。

谷川

みんなすごくちゃんとした感性を持つてる子たち
ですよ。

宮崎

ありがとうございます。そうですね。

この授業は、また後で申しますが、この人たち
にとって今までにない経験をするような授業にな
りましたし、私自身もやっぱり今までにないよう
な経験を、谷川さんの詩を通して、それぞれがし
たんですね。

ふつう、講義形式ですと、私たちが講義をしてい
くんですけど、この授業はほとんどがディスカッ
ションなんです。一コマだけ、私もちよつと講義
らしいことをしてみようかと思ひまして、講義を
したんです。そうしたら、学生のテンションが低
いんですよ。(笑) やっぱりディスカッションに

谷川

なったほうが……。我勝ちにものを言いたいとい
う。

絶対そうだと思いますね。僕が講演ができないの
はそれなんです。一方通行で伝えることはなん
か全然リアリティーがない感じがしちゃって。言
葉というのは常に自・他の間の流れがないと生き
生きしないでしょ？ だから、こうやってない
と、やっぱ駄目だなと思うんだけど。

生徒たちがそう感じたのは、あなたには申し訳な
いけれども、結構正しい感性だろうなと思いま
す。

宮崎

そうですね。ここの学生たちは割とおしとやかな人
が多いから、やりなさいと言えば、もちろんたく
さんレスポンスを返してくれるんですけど、今回
のこの授業に関しては我勝ちですね。とにかく私
が……という感じで、前へ、前へ。

谷川

それもちよつと珍しいですね。

宮崎

面白いんです。

谷川

こういう会に行つて、学生たちに「何か質問あり
ませんか」と言うでしょ？ そうすると、まず手

は挙がらないことのほうが多いんですよ。一人が挙がると次々挙げてくるんだけれども。

我勝ちにというのはアメリカでしか経験していませんね。アメリカの学生はほんと我勝ちですね。

どんな愚問も恐れずにばかみたいなこと聞いてきますね。(笑)

宮崎

今回のこの授業でも、後で申ししますが、自身をそこまで出さなくてもいいというぐらい出した子もいたんですね。みんなが驚愕するようなシチュエーションもありました。私も非常にいい経験をさせていただいたんですね。

■ひらがな・カタカナ・漢字

宮崎

ひらがなに関することで言いますと、谷川さんのすごく有名なこの詩がありますよね? 「はる」。

谷川

これは僕が十八歳ぐらいのときに書いた詩ですからね。

確か初めてひらがな表記で書いた詩の一つです。

宮崎

谷川

この頃は、ひらがな表記がどういうものかということなんか、ほとんど意識してなかったんですけど、こういう内容で書いてって自然にひらがなで書いたという記憶があります。

そうですか。
はい。

はる

はなをこえて

しろいくもが

くもをこえて

ふかいそらが

はなをこえ

くもをこえ

そらをこえ

わたしはいつまでものぼつてゆける

はるのひととき

わたしはかみさまと
しずかなはなしをした

宮崎

これはほんとに自然に出てきたという感じですか。

谷川

この頃、詩を書き始めた頃ですけども、全然別に詩とは何かとかあんまり考えずに、ただ言葉が出てくるものを書いてたという、そんな感じですね。そんなに手直しをしてなかったような気がします。今はものすごい手直しするんですけど……。

宮崎

「かみさま」なんて平気で書いちゃってますよね？（笑）この頃、やたら「かみさま」と書いてるんですけどね。
そうなんです。私もそこはちょっとお聞きしたいところなんです。

谷川

これは『二十億光年の孤独』という最初の詩集ですよね？
はい。

宮崎

この中を見ていくと、「神様」ももちろんたくさ

ん出てくるんですけど、「不安」という言葉も結構……。

谷川

そうですね。

宮崎

谷川さんの中では珍しいですよ？ 「不安」を「不安」という言葉で描いて四つも五つも同じ詩集の中に出てくるというのは。

谷川

今はあんまり「不安」という言葉を使いたくないかもしれませんが。すぐく、何というのかな？ きたい言葉で、ほんとに人間の体なんかについてない言葉だから。この頃はそういうことをまだ全然考えてませんでしたから。

宮崎

やはりこの年頃は「不安」がいっぱいあったと思うんです。

そうなんですよね。まさに今、学生たちはこのさなかに生きている。
そうだと思いますね。

谷川

早く救い出してほしいと言った子もいました。女の人の詩（『今日までそして明日から』）を読んでたときに、もう早く五十歳ぐらいの女の人の人たになっ

谷川 それはありますよね。

宮崎 五十は五十でいろいろ悩みはありますけどね。

(笑)

谷川 どんな悩みなんですか。

宮崎 いろいろ、いろいろです。実にいろいろ。

谷川 ちょっとそのお話しましょうか。(笑)

宮崎 いや、それは……。 (笑) 今日は谷川さんの。

谷川 僕も五十歳ぐらいのときには、『ミッドライフ・

クライシス』とかいう本を読みましたね。『中

年の危機』。中年で大変なんですよ。

宮崎 ありますよね？ あんまり深く共感しても何です

けど。(笑)

この詩は面白くて、すごく「安らぎ」を感じたと

いうところに分類した子もいて。

谷川 なるほどね。

宮崎 みんなに選んできてもらったんですね、詩を。そ

うしたら、二人の子がこれを選んできたんです。

一人の子はとも「安心」した。一人の子は「不

安」でしかたがないと言ったんです。

一人の子は、『二十億光年の孤独』の中でこれを

読むと、「不安」という言葉がいっぱいあります

し、それと相対化して安心できると言うんです

ね。

ところが、もう一人の子は、『二十億光年の孤

独』という詩集から離れたところで、他の詩との

相対で読んだんだそうです。そうしたら、地に足

の着いた詩が割とたくさんあって、それが谷川さ

んの詩の「安心」につながってると思ったそうで

す。そこからすると、この詩はどんだんどんだん

どんだんどんだん上がつてつてしまふし、妙な静

けさがあるので、「不安」なんだそうです。

私にとっては意外な分かれ方をして。

ほとんど正反対の意見ですよ。

そういうことがあるんですね。

谷川 詩というのはもとと散文と違って非常に多義的

で曖昧なものだから、そういうふう読んでくれ

たのは、僕としてはうれいんですよ。どつちか

に決めないでほしいという感じがありますね。

ちなみに、この授業を学生たちは二十数人で受け

てるんですけど、みんなプレゼンテーションする

わけですね、自分で資料を作ってきて。

どんな資料かというと、この人なんかはこういう形で（スクリーンに映して）、入口さんという四年生の子なんですけれども、こうやって「安らぎ」とか、「不安」とか。

谷川

レイアウトしてね。比較する。

宮崎

そうなんです。こうやってみんな作ってきてくれる。

これを作るにあたって、友達同士でデイスカッションしてくるらしいんです。これは入口さんとは別の学生ですが、いっしょに受講しているある子と話しをすると、「自分がこれは「安心」だと言うと、彼女は必ず「不安」だと言う。いつも反対です」と言うんですね。デイスカッションするには面白いんですね。

谷川

そうですね。

宮崎

この「はる」もやはりそうかなという感じがしますね。

谷川

そういうふうに反対意見が出て、それをデイスカッションするのは今、とても必要なことだと思います。

うんですね。大きな視野で見て。政治の世界

でも何でも。特にジャーナリズムのマスメディアの世界なんかもそうなんだけども。日本人は何しろいまだに聖徳太子だからさ、和を以って貴しとなすで、議論が苦手ですよ。

詩の世界でも批評というのがすごい衰えてるんですよ。紹介はみんなしてくれるのね。だけど、ほんとに腰据えて批評してくれる人が少なくなってる。

そうなんです。

これは大きい話になりますけど、正義と悪は一律

じゃないんですよ？

宮崎

そうなんです。

もちろんそうですね。

谷川

反対側の人にとっては正義であることが、こちら側にとっては悪だということもあるわけですよ。

宮崎

それは今、世界を見れば、すぐ分かっちゃいますね。

谷川

だから、やっぱりデイスカッションすることは大事なことだと思いますよね。

宮崎

ね。

谷川

ね。

宮崎

ね。

谷川

ね。

宮崎

ね。

谷川

ね。

谷川　　すぐく大事だと思います。

宮崎　自分の身をもう一回対岸に置いてみて考えてみることは、やっぱりなかなか難しいことなんですけど。

谷川　今、この大学ではディベートの時間はあるの？

宮崎　ディベートは、少なくとも国文はやってないですね。ただ、演習で、自分たちの卒業論文に関する作品についてはかなり激しくディスカッションしますね。

谷川　対話というのはちゃんと教えるべきですよね？小学校の頃から。

宮崎　それはそう思いますね。私も学生によく言うのは、発信、発信とよくこの頃言われるんですけど、それはきちんと受信ができないと……。

谷川　もう絶対そうですよね。

宮崎　呼吸と吸気のバランスが良くないとそれができないので。人の言うことがどれだけきちっとキャッチできて、そこからどういうふうに発信できるか。それがディスカッションの基本かなと思ったりしますね。

谷川

詩の世界でも、詩というのは学校教育の中では、まず自己表現というふうに捉えるんです。小学校で。自分の思ったままを書きなさい。何でも感じたことを正直に書きなさい。それは詩の一つの機能ではあるんだけど、現代詩の世界はちよつとそれにとらわれていて、つまり、自己表現的な詩が多くて難解になつてゐる傾向があるのね。それに対して例えば大岡信さんなんか、日本の連句という俳句を連ねていく伝統を現代に生かすということ、連詩というのを始めたんですね。

宮崎　「権」でやっていらつしやいましたね。

谷川　そういう連詩みたいなことをすると、相手の書いた詩をちゃんと読まなくちゃいけないくて、それに自分が何かの形で連ねていつて、次に送るといふ、一人で書いてるのと全然違う詩の書き方になるわけね。

ヨーロッパなんかでそれをやると、みんな怒るんですよ。「他人と一緒に詩を書くとは何事か。詩というのは一人で書くものであって、こんな他人

のいる前で書くのは、トイレの戸を開けっ放しにするようなもんだ」というぐらいの反発があるわけ。それがやつてるうちにだんだんだんだんそういうのがなくなってきた、最後は別れが惜しくて泣きます、みたいな。(笑) だから、不思議ですね。

宮崎

それはある意味で音楽とも通じてますよね？

谷川

そうですね。

宮崎

音楽のハーモニーは人の音を聴いて、音を重ねたり、合わせたりしますよね。

谷川

それと、ジャズのインプロビゼーションなんかは、ほんとに誰かの楽器の音を聴いて、それに合わせていくわけでしょう？ あれはすごいうらやましいんですけどね。

宮崎

よく聞くということですよ？ 聞いて、出すということ。

谷川

そうですね。

宮崎

ちよっと今、そのバランスが崩れているような気がしないでもないですね。

谷川

政治の世界でも全然それがうまくいってないよう

宮崎

な気がしますけどね。

ほんとですよ。いろんな価値観があるんですけどね。

もう一つ、ひらがな詩について出してきた子がいて。さっきの白井さんなんです。「びつくりしちゃった」と言ってた。「にわ」という詩を持ってきたんですよ。これはひらがな詩なんだけれど、とても「不安」だと言ったんです。

どうしましょう。谷川さんに読んでいただくか、私が読みましょうか。

谷川

どちらでも。

宮崎

読んでいただけるなら……。

谷川

いいですよ。

宮崎

お願いします。

谷川

(背後のスクリーンを見て) 背中向けて読んでいいのかな？ 皆さんに背中向けて読んじやうけど、いいんですか。

背中も、見たい。(笑) どうぞお願いします。

宮崎

にわ

そこにはだれもいないのに
そこにもしろいはながさく
そこにはだれもいないのに
ぐるりにたかいへいがある

そこにはだれもいないのに
くうきにてつのあじがする
そこにはだれもいないのに
もののかたちが見えてくる

そこにはだれもいないのに
わすれることができなくて
そこにはだれもいないのに
なきたいようなひのひかり

そこにはだれもいないのに
かすかにひとはうつむいて
そこにはだれもいないのに
いろはにほへとちりぬるを

宮崎 ありがとうございます。

谷川 これを選んだ彼女はというふうに言ったかといったら、これ、きちつと揃ってるんですね？はい。七五調だね。

宮崎 そうなんですよ。その七音五音が、形にはめられていく「不安」があると。

谷川 なるほどね。

宮崎 これは独特の……。言われてみると確かにそうだなと。

谷川 普通の日本人は「安心」するんですけど。

宮崎 「安心」するんです。しかし、「安心」できないんですね。型にはめられていく「不安」と、そして、何と最後の「いろはにほへとちりぬるを」を読んだときに、打ち切られたんだと言いました。え？

宮崎 打ち切られてしまった、と。

谷川 打ち切られた。

宮崎 世界が静かに打ち切られたなと。これがずっと続いていくかなと思ったんだそうです。

谷川 ああ、なるほどね。

宮崎

そうしたら、最後に「いろはにほへとちりぬるを」で終わったので、打ち切られて、すごい「不安」だったと切々と語りました。

谷川

最後の行で切られたという感覚は面白いですね。

宮崎

谷川さんはそういう感覚ではなかったですか。

谷川

全然違いますけど。多分「いろはにほへと」が体についてない世代ですね。我々は「あいうえお」よりも先に「いろはにほへと」が身についていた世代だから、「いろはにほへと」は「色は匂えど」という意味ももちろんあるんだけど、日本語の一番体に即した音で、日本語の源みたいな感じがあるわけ。だから、これがあるとむしろ「安心」するんですよ。そういう感じで書いてるわけです。

宮崎

そうなんです。これ、怖かったそうです。「いろはにほへとちりぬるを」。

谷川

なるほどね。面白いですね。

宮崎

面白いですね。

谷川

この詩全体にちょっと離人症的というのか、人から離れたようなムードがありますから、全体に

宮崎

「不安」だというのは分かりますね。

そうですね。片や、これを読んで、すごく「安心」だったという子もいるんですね。

谷川

それはやっぱり七五の調べというか、リズムで「安心」するというかもしれないですね。

宮崎

そうしたら、彼女が反論してましたね。「くうきにてつのがじがする」んだよ。どういうことか分かってる？」みたいなことは言っていましたけど。

(笑)

谷川

なるほど。

宮崎

そういうことがやりとりとして。「いや、それでも「安心」なんだ」と言ってる子もいますので、これは非常に面白いですね。

谷川

詩がそんなデイスカッションの材料になるなんて、すごいうれしいですね。

宮崎

もう手を挙げないで発言しますからね、みんな。大向こうから声が掛かってるみたいな感じ
で。

もう一つ、「ミライノコドモ」というカタカナの詩がありますよね？ これに着目した人もいたん

ですよ。

何だかお読みいただいてばかりで申し訳ないんですけど。

谷川 僕、商売ですから、詩読むの。(笑)

宮崎 よかったです。じゃあ、お読みいただけますか。

谷川 僕はカタカナだけの表記つてのあんまりしてないんですよね。

宮崎 そうですね。それで、この人が、柏木さんという

女の子なんですけど、着目してきましたね。

なるほど。

じゃ、お願いします。

谷川

宮崎

谷川

宮崎

谷川

宮崎

谷川

ミライノコドモ

キヨウハキノウノミライダヨ

アシタハキヨウミルユメナシタ

ダレカガアオゾラヤクソクシテル

ミドリノハラモヤクソクシテル

コレカラウマレルウタニアワセテ

*

ミライノコドモハ

オトウサンヲシカツテル

ミライノコドモハ

オカアサンヲアヤシテル

マチヲコエテ

ハタケヲコエテ

オカヲコエテ

ミズウミヲコエテ

チヘイセンノムコウカラ

ミライノコドモハスキップシテキタ

ナニガスキ?

ナニガキライ?

ドコカラキタノ?

ナニヲキイテモ

ミライノコドモハシズカニワラウダケ

コカゲニスワツテミエナイモノヲミツメテイル
ブランコニノツテキコエナイオトヲキイテイル

ミライノコドモノアタマノウエヲ

サヨナラトコンニチハガ
チョウチヨミタイニヒラヒラトンデル

宮崎

すてきですね、「ミライノコドモ」。

この人が「ミライノコドモ」に着目したのは、向こうから「ミライ」がやってきてくれる感じがいいと言っていました。

谷川

なるほどね。

宮崎

「ミライノコドモ」が「スキップシテ」やってきますよね？

私はこれを読んだときに、「マチヲコエテ ハタケヲコエテ……」が、さっきの「はなをこえくもをこえ そらをこえ」、あの『二十億光年の孤独』の「はる」とよく似ているなと思ったんです。

谷川

なるほど。自分では気がつかなかったけど、そうでしょうね、きつとね。

宮崎

全くそうですね？ 「マチヲコエテ ハタケヲコエテ オカヲコエテ」と。で、「ミライノコドモハスキップシテ」来るんですね、こっちへ。

谷川

さっきの『二十億光年の孤独』の「はる」は「のぼって」いくんですね、こちらからね。

宮崎

「のぼって」いくんです。

そして、そこに「かみ」がいるという。これは逆なんだなと思ったんですけど。

カタカナ詩はそんなに多くはないですよ？
そうですね。

谷川

宮崎

カタカナとひらがなの違いって、創作されるときに何かあるんですか。

谷川

もちろんそれはあるんですけど、説明しにくいところなんです。

ひらがなのほうは割と説明しやすいんですね。
我々はひらがな漢字交じりになってますよね？
すべての局面で。

漢字・漢語というのは、いまだにちよつと外国語らしい、外国語みたいな感じがしてるわけね。文字は中国から伝わってきたわけだし、漢字・漢語の持つてる概念は西洋由来のものが多くでしょ？
西洋の言葉を、つまり、漢字・漢語があつたら、割と明治時代にパッと輸入できたわけじゃない

いですか。だから、すごく根無し草っぽいんですよね、漢字・漢語は。

それに比べて、ひらがなというのは、なんか根を大和言葉に下ろしてるというのか、なんか日本語の昔のものを伝えていて身についてる感じがするんで、詩もできればひらがなのかなのもので書きたいというのがずっと底にあるんですよ。

ただ、今はもうひらがな漢字交じりでなければ、通用しないわけだから、子どもなんかを読者に想定した場合にはひらがなだけで書いてもいいみたいな、そんな感じがありますよね。

私たちは詩の研究をするときに、ひらがなに「開く」という言い方をするんですね。漢字からひらがなに開くということ。

最初にひらがなの大事さに気がついたのは、子どもの絵本のテキストを書いているときでしたね。

前にもしゃべったんだけど、例えば「社会」ということを幼稚園児に伝えようとしたときに、「社会」と漢字で書いても分かんないわけですよ？ だけど、それをただひらがなに開いても分かんない

宮崎

いわけですよ？ それで、「社会」という概念を幼稚園の子どもなんかに分かるようにどうやって開けばいいのかというのがすごい問題になったのね。で、結局誰も思い付かなかったんですよ。こう言えばいいというのが。それが僕がひらがな詩を書く一つのきっかけになったんですけどね。現代詩は西洋由来の難しい観念を漢語で書いてるのが多いので、それをもっと普通の日本人の暮らしに根付いている、体に根付いている言葉で書けないかというのがひらがな表記の一番大きな動機なんですけどね。

宮崎

それはすべてに通じますね。

谷川

そうなんです。

宮崎

私たちが例えば研究論文を書くときも、若いときの論文はがちがちなんですね。高尚なことを何とか言おうという漢字ばかり。そうすると、指導教員から何を言われるかというと、ひらがなに開いて小学生でも分かるようになるよね。

谷川

難しいことを易しく言う人ほど高度なテクニク

谷川

宮崎

の持ち主なんだと。

谷川 ほんとそうなんですよ。

宮崎

こんなに漢字ばかり置いて分かるもんか、とよく言われます。やつぱり柔らかに聞くことは永遠のテーマだなと。

谷川

そうですね。現代日本語はまだそういう西洋の影響から脱してないから。何百年もかかると思うんです、日本語として根付くのは。

宮崎

法律用語はほとんど漢語だったりしますから、そういう意味合いも深いですよ。

谷川

カタカナはまたちよつとひらがなと違って、むしろ抽象化したいときに使うことがありますよね。

西洋の用語は全部カタカナになってるけどね。言葉の持つるニュアンスとか、そういうのを削って書けるみたいなの、そんな感じがあるんですよ。

宮崎

谷川さんが多分お子さんだった頃は、国語の教科書はカタカナですよ？

谷川

カタカナ。「サイト サイト サクラ ガ サイト」。

宮崎

サクラ読本ですよ？

谷川

今はそうじゃないんですね？ ひらがなからなんでしょ？

宮崎

今はひらがなからです。

谷川

だから、カタカナを知らない子がいるみたいね。なんだか外国語的な感じですよ？

宮崎

「サイト サイト サクラ ガ サイト」みたいな感じは残っていらっしゃるんですかね？

谷川

意識はしてないけど、体に残ってるんじゃないですかね。

宮崎

あの頃は『コドモノクニ』とか、そういうのも全部カタカナですよ？

谷川

はい。

宮崎

そんなこともこのデイスカッションの中で出てきたんですよ。

谷川

じゃあ、ちよつと次へ進んでいこうと思うんですけど、今度は『二十億光年の孤独』の中の詩で、今の同じ人が持ってきたんですよ？

宮崎

これは漢字が結構多い詩ですよ。そうなんですよ。これは漢字で、そして、さつき谷川さんがおっしゃったように、いろいろなこと

を谷川さんが考えてらっしゃるところで

す。この詩は、一番上に書いてありますが（スクリーンに映っている学生のレジュメ）、「不安」というところに彼女は目が行ったんですね。最後に「神」が出てきますよね？

谷川 はい。この時代は朝鮮戦争があつた時代なんですよね。

宮崎 一九五〇年でしたね。

谷川 僕はまだ十代の終わりぐらいだから、徴兵制度というものの記憶というのかな？ 残ってるんですね。日本で徴兵制度が復活することは現実的にはあり得ないわけけれども、朝鮮戦争があることでの「不安」はやっぱりはつきり記憶に残ってますね。

宮崎 そういうことなんですな。「一九五一年一月」というのはそういう意味もあるわけですね。

谷川 そうなんです。それがやはりこの詩の基本的なムードとしてはあるんじゃないかな。ただ戦争が怖い、戦争に行かされるのが怖いということではなくて、現代文明の文脈の中でこういう言葉を書

いてたと思うんです。

宮崎 なるほど。では、お願いいたします。

谷川

一九五一年一月

少女

「暖いものはすべて金属の死を沈み
花と樹と流れが地図の上に汚れる

音楽は半旗のようにとぎれ

そむけた神々の顔の涸れ果てた泉で

私は静かさと尊とさの服を焼く

そのあとすべてを捨てることだけが残る」

博士

「恐怖は私を剥ぐ」

現実の裸の公理が肌にふれると

高い次元が器官の中に堕ちてくる

抽象や感情が拷問され

焼ける臭いのする叙事詩がのたうちだして

人間が永久に不在になる」

海

「沈んでいる霊達のために

私の憐憫は祈りにかわつてゆく

沈んでいる愚劣のために

私の悲嘆は怒りにかわつてゆく

深く湛えていることのさびしさが

私の姿を荒くする」

猫

「毛皮を透して不安は硝煙のようにしみ

それが本能を曇らせる

永い闇が私の眼の緑を染めてしまい

生まれようとする仔等の歎きの上で

原始の時代への郷愁に

私は夜中なき続ける」

宮崎

この「海」は明らかに第二次大戦の戦死者みたいな人たちのことを連想して書いてますね。やっぱりそうなんです。ちよつと私、そこをお聞きしたかったです。

谷川

まだすぐくそういうものが深く子どもの心に残つてた時代ですからね。

「乞食」、今、乞食という言葉、使いませんよね？

差別語ですね？

宮崎

でも、いいですよ。詩の中のことは。

谷川

乞食

「思い出が私を暗くする

しかし訴えるべき相手を私は知らぬ

信じられるのはただ私の犬と私の腕と

幸福が死に

愛が死に

やがて私の骸が死ぬ」

少年

「生きてゆくことが必要だ

信ずることが必要だ

行動することが必要だ

若さが私を大きくする

銃の前に私はふるえないで立つてみせる

そんなことはやめようとふるえなくて叫んでみせる」

原子爆弾

「呪いのみが私を支える

無知と傲慢とが

ひとつの法則を畸型にする

そこからすべてがひびわれてくる

やがて無が草の形をして

一瞬宇宙を照らすだろう」

月

「夜を美しくすることが

死者の眼を輝やかせることが

私を悲しませる

私の上には誰もいない

私に触るがいい

そうすれば地球の冷たさも解るだろう」

兵士

「私は困惑する

つよい筋肉とつよい心とをもちながらも

錯雑が私を眩惑する

進歩や死について私は何も知らない

しかし町や愛や雲や歌について私は知っている

それらのために生きていたいと思は思う」

機構

「私は知らぬ

私は未だ人間の奴隷だ

私は冷たい　しかし

私はひとりの天才を待つている

むしろ

すべての人間を信じている」

神

「私は創つた

この最後のところの括弧をとじていないのは非常に意図的なんです。

宮崎

ここが非常に注目の的で。これを選んできた学生は、「不安」がどんどん加速していくということを書いていましたね。これを読んでいくとどんどん加速していった、特に最後の「神」「私は創った」というのは「私が創った」でもなく、「私は創った」であり、かぎ括弧も結ばれないままで、すごく「不安」だよ。

谷川

ちゃんと読んでくれてますね。誤植だと思ったりするんじゃないかと思って。(笑)

宮崎

これは原典で見るともつとすごいですよ。「神」だけが最後の一枚、別のページになってますね。そうですね。

谷川

先ほどの浮き立つような感じの詩とはまた全然違っていて、これは少し哲学的な、それが全体にせり出してきたようなところがありますね。

谷川

ほんとに若い頃の詩だなんて感じだけど。でも、やつぱり「私」というものをこういうふうにするものに分裂させて、多次元的に捉えようとしていて、今、この辺から始まっているんだと思いますね。

宮崎

さっきの「かみ」とこちらの「神」と、同じ詩集の中でもちよつと面差しが違う感じがしますよね。

谷川

違いますね。

■ 「神」と戦争

宮崎

谷川さんにお会いしたら、自分自身の問題としてお聞きしてみたいことが一つあって、それがやつぱり「神」の問題なんです。

これは谷川さんが幼い頃のお写真ですよ(スクリーンに、模型飛行機を空に向かわせようとしている谷川少年)。お幾つぐらいですかね。一九四二年と書いてあるので。

谷川

十一歳かな? 模型飛行機を作るのに夢中だった頃ですね。

宮崎

(スクリーンに、大勢の子供の最前列中央で朗らかに笑う谷川少年) たくさんの中にいらっしゃっても、すぐに分かる、谷川さんだって。

谷川

だって一番前にいるんだもの。(笑) この頃、

僕、小学校にちゃんと適応してて、級長さんとかやってたんですよ。

宮崎 そうなんですってね。なんだか目がキラッキラしてますよね？

谷川 そう？ 知りませんけど。

宮崎 これを学生と見たとき、ワーツと歓声が上がったんですよ。

谷川 ほんと？

宮崎 何か受けるものがあるんですね。キラッキラしたお子さんだなという感じがあつて。

どうしてこのお写真を出したかというと、谷川さんのお生まれが一九三一年、昭和六年の満州事変の年だということを思うからです。一九四五年の終戦までの十五年戦争の一番始まりのところ、戦争の中で生まれてらっしゃる感じになりますよね。

谷川 そういうことになりますね。

宮崎 この時期、谷川さんたちがお小さい頃は、「神」が独特の響きを持っていますね。例えば天皇を「神」といつてみたり、戦争で亡くなった人たち

谷川

を「軍神」といつてみたり、そういうたぐさんの「神」が、いわゆる生身の「神」ですが、そういうものがいるんなところにあらわれていて、戦時下の詩を研究したりすると、そういうたぐさんの「神」が出てくるんですね。あるところでは母親までが「神」になっているというような感じなんです。

そういうものを恐らく谷川さん自身も言葉として、雰囲気としてこの時期浴びていらつしやったかと思うんですが、その辺りはどうなんですかね。

自分の住んでる家庭に一番影響を受けるわけですよね？ 子どもだから。

まず、私の母親は同志社大学の出で、クリスチャンではないんだけど、祭壇にあるワインを盗み飲みしてたみたいな不良学生だったんですよ。

(笑) 彼女は賛美歌なんかもしょっちゅう歌ってたし、キリスト教の「神」は割と身近にあったわけですから、母親を通して。

幼稚園が僕はキリスト教系の幼稚園だったので、

そこで天国と地獄の掛図を見せられて。天使がはかりを持って、青いほうが行くと地獄に行くみたいなの、すごい怖い話を聞いてね。そういうのがありますね。

うちは仏壇も神棚もなかったの。うちの父は常滑の古い家から東京の大学に出てきたわけでしょ？だから、そういうものを振り捨てたかったところがあるんで。簡単に言えば、そういう既成宗教は信じてない人だったと思うんです。戦争中だったから、神棚がないのはまずいんで、うちの母がどうか近所から安い神棚を買ってきて、どっかに掛けたのを覚えてますよ。神なんていう植物のことはそれで知ったわけですね。

宮崎

谷川

こういう両側にあるんですね。

いわゆるアミニズム的な日本の、岩にも木にも「神」が宿るといえるのは、キリスト教の神々を知ってても、なんか身についていて、それがずっと今でも自分の中にちゃんとある感じがするのね。

でも、それと同時に、僕はギリシャ・ローマ神話

が好きで。ギリシャの神々はすごい人間的じゃないですか。美人もいるしね。(笑)

そういうのがほんとにごちゃ混ぜだったんです。

僕は小学生ぐらいのときに夜、寝る前にお祈りをしたらいいんですね。よく覚えてないんですけど。それは簡単に言えば、「お母さんが死にませんように。お父さんが死にませんように」みたいな、そういう話なんだけど、その時は一体どういう「神」をイメージしてたのかってことはよく覚えてないし、別にそんなはつきりした人格神的なものはイメージしてなくて、何となくエネルギーに対して言ってたんだらうなと思うんですけどね。

そういう背景で書いてるんですね。

宮崎

戦後の谷川さんの詩はそういうところから、いわゆる軍国主義的なところとかまびすしく言われていた「神」とは無縁ですね。

谷川

全然それとは無縁で過ごしていたという感じですね。

宮崎

無縁で過ごしていたんですね。そういうこと

なんですね。

私がお聞きしなかったのは、『二十億光年の孤独』が敗戦後七年目のところを出されたときに、「しずかなはなしをした」という「かみ」が出てきたり、「私は創った」という「神」や、結構たくさん「神」が「不安」という言葉とともに出てくるんですけど、読者の人たちはどんな感じで捉えてたのかなと、今の私の研究からすると興味のあるところなんですよ。

谷川

なるほどね。僕が最初に詩を出した頃は、やはり「荒地」の詩人たちが一番読まれていて、それと同じに、左翼系では『列島』という雑誌があつて、そこは共產主義的な流れをくんでいたでしょ？

そういうふうに割と社会に密着した詩が多かった中で、僕がああいった関係ないような能天気な少年の詩を書いたことが新鮮に受け取られたようなんだけど。詩壇ではあんまり認められませんでしたね。大学の先生のお坊ちゃんがかわいい詩を書いてら、みたいな感じでさ。(笑)

宮崎

そうだったんですね。でも、衝撃の大きさがある

谷川

と思いますよね。谷川さんみたいな経験を戦時下でしていた人はそんなに多くはないと思うんですよね。みんな神様で、お祈りしなきゃいけない先が天皇だったというようなね。

我々もそういうことを学校ではやらされていたし。

一番大きな戦争の影響は、僕は五月の東京大空襲を経験していて、家のすぐそばまで燃えてきたんだけど、家は被害に遭わずに済んで。ただ、家の前をぞろぞろと東のほうから避難民といえいいのか？ 焼け出された人たちが通っていった。

翌朝、友達と一緒に自転車に乗って焼け跡を見に行っただけですね。焼け跡の光景はあんまり自分の表現には関係ないんだけど、体の奥深く底に持つてると思うのは、やっぱり焼死体がごろごろしていて、焼死体を割と平気で、子どもだから見て、「あの子、お尻の穴があいてら」みたいなことやってるわけですね。それと同時に、焼夷弾の残りを拾ってきて、それをぶつけるとちよつとマグネシウムみたいな光がパツと出たりとか、

そういうのが、男の子だから、すごく面白くて。

だけど、焼け野原のイメージは原子爆弾の広島・長崎を見たときにも重なり合ってるし、東北の震災のときにも記憶が重なり合うようなところがあるんですよ。だから、多分自分ではあんまりそれは意識してなくても、自分が生きる上で非常に大きな体験の一つになってるかなとは思いますがどね。

宮崎

さっきおっしゃっていた身体感覚としてそれが刻まれていくわけですね。

谷川

だと思っただけです。

宮崎

坂口安吾が『桜の森の満開の下』という小説を書いてますけど、あの人もどうやら焼け跡を見て、それが『桜の森の満開の下』のイメージに、実際に咲いていた桜の花と、それが散り散りになってゆくところに結んであるんじゃないかというふうに言われていますね。

谷川

一種の原風景として。我々世代は、野坂さんとかをはじまりとして焼け跡派なんていわれてたわけですからね。やっぱり大きいんですね。

宮崎

でも、谷川さんはそれをそのまま丸々出すということではなく、ですよね？

谷川

家が焼夷弾で焼けてれば、またちょっと違ったと思うんですよ。自転車で焼け跡を見に行つて、焼死体を見たという、なんか距離があるんですね。それは大きかったんじゃないかな。

宮崎

そういうことも含めて、「神」のあり方は大変興味深かったのだ、それをお聞きできたのはすごく幸せでした。

前から授業で戦時下の「神」についてしているんです。戦時下のいろいろな詩の中から「神」をピックアップすると、さまざま出てくるんですね。最後に、たいてい谷川さんの「はる」というひらがな詩で結びます。これが隔絶した感じでパツと出てきて。でも、戦争の記憶のある人たちのところへこれがさつと出てくるので、どうだったんだろうね？ というので大体授業が終わる感じなんです。ですから、とても興味深くて、ぜひこれはお聞きしたかったことだったんですね。ありがとうございます。

■詩との内的対話

宮崎

ところで、はじめの方で授業での劇的な出来事と言いましたが、それについてお話ししましょうか。最新詩集『あたしとあなた』の中に「黒板」という詩がありますよね？

谷川

ああ、ありますね。（笑）

宮崎

あります。これは一体どういう感じで出来上がったんだろうというのをちょっとお聞きしてみたかったです。

谷川

詩というのはなかなか出来上がり方がうまく言葉にならないんですけど。

宮崎

黒板は学校のシチュエーションですね？

谷川

そうです。これが出てきた経験は、一つは小学校の授業を何人かの心理学者とか、教育学者とか、私とかがビデオテープで幾つも幾つも見て、数学の授業から、国語の授業から、いろんな授業を見て、それについて教育という観点で話し合うプロジェクトがあったんです。岩波書店からビデオ

テープと本になって出ているんですけど。

そのときに小学生たちは、友達同士ではほんとに普通に口語的にしゃべってるのに、黒板の前に立って発表すると全然違う日本語になることが非常に印象的で、それを河合隼雄さん、元文化庁長官の、ユング心理学の河合さんなんかと話し合ってたときに、河合さんが「どうしてそうなるのか、私でも分かりません」と言ったのがすごい印象的だったんですよ。それは日本語の非常に特殊なことなんですよね。そういう記憶が多分これを書かせたところがあるような気がします。

宮崎

改まった感じになっているということですよ？言葉が。

谷川

そう。そこで日本語がすぐころつと変わってしまふということですね。

宮崎

そういうことだったんですね。

谷川

別にそれが基礎になって、基本になって書いてるわけじゃないんだけど、「あなた」にわたしを代入すれば」ということは、僕は詩を書く上で常に考えてるといえるのかな？ つまり、自分

宮崎

だけじゃないと。自分の中にあなたがいるし、彼も彼女もいると。人間関係はそういうもんだと考えてる。「黒板の 前で立ちすくんでいる」というのは、授業のビデオを見ているときに、そういう子もいるわけですね。なんかしゃべりたいんだけど、しゃべれなくなってしまう。教育現場でそういうことがあっていいのかとか、いろいろ考えましたからね。

実は、授業で「不安」と「安心」とで選んできてくださいと言ったら、これは「不安」でも「安心」でもなく、この一篇をどうしても語りたいという学生が一人いました。



宮崎 谷川

その子は、絶対に名前を出してくれると言ったので、名前は出しませんが、小学校のときにいじめに遭ってたんだそうです。それで、「（あなた）に わたしを 代入すれば」の「（あなた）」というのは、そのときに何かにつけて声を掛けてくれた小学校のときの先生なのということでした。今、谷川さんのお話を聞いていると、「黒板の 前で 立ちすくんでいる」というのは、こっち側を向いて立ちすくんでいる感じですけど、その彼女は多分黒板に向かって「立ちすくんで」たんでしょうね。

私たちはそんなことまで語ってくれとはもちろん言っていないですけど、語れたかったですね。「この機会に語りたい」とグジュグジュになって語ってくれました。

ほんと。

他の子たちも「もう泣かないでいいから」と。衝撃的な授業になってしまったんですよ。

この子の発表が終わった後、みんな二の句が継げないので、「もう終わります」と言って終わった

んです。

本人も「大学の授業でこんなふうに涙を流してしまった私はよかつたんでしょか」と後でやってきました。

先輩たちは先輩たちで、「あんなかわいそうな思いをして。こんなことを聞いてしまつて、どうしていいか分からなかつた」と言う子もいたし、「もう泣かないでいいよ」と言つてあげたい子もいたし、「私は両方の気持ちが分かる。いじめたこともあるし、いじめられたこともあるから、すぐよく分かる」という子もいました。授業のときにはみんな言表できなかつたんですけど、後で私と廊下で擦れ違つたりすると、「ちよつと先生」と言つて私を引つ張つてはそういうことをみんな口々に言つて。

これが、そのちよつとびつくりした授業なんです。

なるほどね。

谷川
宮崎

彼女にとつては、涙とともに話せたことはとてもよかつた。でも、それだからといって、そのこと

がなくなつてしまふわけではないですね。

もちろんそうですね。

谷川
宮崎

さつき谷川さんがおつしやつたように、身体に刻み付けられた記憶はそんなことでは解消はできないですけど、それを言葉にできたこと。

そうね。そういうもののきつかけになることは、すぐく、なんというか、やつぱり責任感じちゃうし。

谷川

詩の言葉は例えば心理分析の言葉なんかに近いことがあつてはすよね。短い言葉ですつとその人の中に入つていけるみたいなこと。意識しないで、そうやつて読むから。

読者がこの詩とそこで内的な対話をしてくれてるというのがすぐく、自分が書いた詩がそういう役目が果たせたのはうれしい感じがしますね。

宮崎

すごかつたですよ。「これは私です」と言いましてから、彼女は。だから、「代入」の「代入」。

そうだね。

谷川
宮崎

まさにそうだったんです。そのときのことがありありと私たちの眼前にも浮き上がってくるようで

した。

でも、野放図に語るのではなくて、非常に抑制された形で一生懸命語ったんですね。ひとり四、五分で語ってくれと言ったものですから、そのフォーマットの中で。でも、十全に語りましたから。

谷川 これは谷川さんの「黒板」という詩の力だなと。自分ではそんなこと全然意識してないんですけどね。

宮崎 成り立ちをお聞きしても別なんですけれど、それは喚起力ということだと思えますね。

谷川 詩の言葉が意識下から出てきていることが大きいんじゃないですかね。意識から出てきた詩の言葉、大体つまらないんですよ。自分でも意外な、思いがけない言葉がポコッと、まだ言葉になつてない意識の暗いところから出てきた言葉は結構強いので。そういうものをどつかで持ってたから、彼女と反応したんでしょうね。

宮崎 響いたんですね。共鳴したというか。
谷川 あ、はい。

宮崎

その語りの力には何人も及ばなかったですね。私自身も自分の経験を思い出しました。だから、私も少し話しましたね。私も実はこんなことがあってと言って。そういうことを語りたくなるような場になりました、この詩のおかげで。これはぜひ谷川さんにお伝えしたい一つでした。そういう授業が展開していったということなんです。

■不安と安らぎの両義性

宮崎

じゃあ、最後、「谷川さん自身が不安に感じている詩を選んでください」とわがままをお願いをしたのが、この「恐ろしい山」ですよ。

谷川

朔太郎つてのは大体恐ろしいんですよ。

宮崎

萩原朔太郎ですね。『青猫』という詩集のなかの詩です。

谷川

何がいいかなと思って、やっぱりこれが割と具体的にいいかなと思って選んだだけ。

宮崎

じゃあ、ちょっとお願いできますか。

谷川

「不安」みたいなものを一種形象化したといえはいいのか、具体的なイメージでいった、詩の中では割と分かりやすい詩なんですよ。

恐ろしい山

恐ろしい山の相貌をみた

まつ暗な夜空にけむりを吹きあげてゐる

おほきな蜘蛛のやうな眼である。

赤くちろちろと舌をだして

うみざりがにのやうに平つくばつてゐる。

手足をひろくのびして麓いちめんに這ひ廻つた

さびしくおそろしい闇夜である

がうがうといふ風が草を吹いてゐる 遠く空で

吹いてゐる。

自然はひっそりと息をひそめ

しだいにふしぎな 大きな山のかたが襲つて

くる。

すぐ近いところにそびえ

怪異な相貌が食はうとする。

彼は前橋だから、浅間山のイメージが多分あるん

だろうと思うんですね。「ちろちろと舌をだして」というのも浅間山は活火山ですからね。

僕も浅間山の麓にうちの父が小さな家を建てて、

毎年夏、行つてゐるんだけど、浅間山って普段はす

ごく女性的な山なんですよ。曲線がきれいで。だ

けど、時々、夕暮れ、曇つてるときなんか近くに

の麓まで行くと、すごく恐ろしい感じがするん

ですね。だから、この詩は僕にとってよく分かつた

詩なんですけどね。

体感できるんですね、その感じが。

そうなんです。鬼の押出しという溶岩流が固まつ

たものがいまだに観光地になつてゐるんだけど、溶

岩流の流れ方なんかもやつぱちちょっと恐ろしいん

ですよ。

浅間山は立原道造や、「四季」の関係の人たちにも

も非常に縁のあるところですけど、それを恐ろ

しい山というふうに。

これは朔太郎の独特の感じ方ですよ。立原とは

全然違いますよね。

宮崎 谷川

谷川

宮崎

宮崎

谷川さんに「ご自分以外の詩人で、恐ろしいと思われた詩を選んでください」と言ったら、これが来て。詩集『青猫』は朔太郎の大事な詩集ですけれど、女の人のなまめかしいものがいっぱい入っている中で、「恐ろしい山」を選んでくださったのは、画期的なことと思って。そうか、浅間山ってそうなんですね。なるほど。そういうことだったんですね。

谷川

はい。

宮崎

一方、谷川さんご自身の詩で「安らぐ」詩をということとお願ひしたのがこれでしたね。谷川さんの『詩の本』から取っていただいた「闇は光の母」。

谷川

闇は光の母

闇がなければ光はなかった

闇は光の母

光がなければ眼はなかった

眼は光の子ども

眼に見えるものが隠している
眼に見えぬもの

人間は母の胎内の闇から生まれ
ふるさとの闇へと帰ってゆく

つかの間の光によって

世界の限らない美しさを知り

こころとからだにひそむ宇宙を
眼が休む夜に夢見る

いつ始まったのか私たちは
誰が始めたのかすべてを

その謎に迫ろうとして眼は
見えぬものを見るすべを探る

ダークマター

眼に見えず耳に聞こえず

しかもずっしりと伝わってくる

重々しい気配のようなもの

そこから今もお

生まれ続けているものがある

闇は無ではない

闇は私たちを愛している

光を孕み光を育む闇の

その愛を恐れてはならない

宮崎

ありがとうございます。これはすべてですね。

谷川

子どもの頃は暗闇が怖かったんですよ。お化けがいるんじゃないかとかね。大体みんな闇じゃなく、光のほうがいいと言う。西洋文明がまさにそうですね？　ずっと光を求めていますよね？

宮崎　そうですね。

谷川　でも、東洋は少し違うところがあるような気がするんですけどね。

暗闇が怖くなくなったのは、ある程度自分が成熟したからかって感じがしますけどね。

宮崎　闇の豊潤さみたいなものがありますよね？

谷川　そうです。

宮崎　それがあるから、光がある、当然そうなんですけど、闇の中の豊潤さだったり、奥深さというか、何か許容してくれる感じ。闇は怖いだけじゃないですね。

谷川　今、真つ暗闇の中で経験するプロジェクトがありますよね？

あります、あります。

宮崎

谷川　僕、まだやってないんですけど、友達がやって、やっぱり非常に面白かったと言っていましたね。

宮崎　真つ暗闇になると聴覚が張ってくるんでしょうし。

谷川　そうですね。触覚とか、聴覚とかね。

宮崎　身の毛がよだってくるような感じ、粟立ってくる

というか、そういう感じがあるから、身体を考える上で、視覚が一つ閉じてしまうと、何かがせり出してくることがあるかもしれませんね。

谷川
そうですね。

宮崎
「不安」と「安らぎ」は両義的だなということ
を、とてもよく語ってくださってる詩ですね。

■詩は「織る」／合唱と斉読の問題／詩人と写真家／小さなファン／人生の楽しみ／別れのことば——意見票から

宮崎
さて、今日は楽しくこの場を終わりましたようにいうことでしたから、いろいろな意見票から、「不安」と「安らぎ」に関わること、関わらないこと、いろいろ出てるんですけど、谷川さんの『谷川俊太郎の33の質問』になぞらえて、パパッと回答えただいて。反射的に回答えただくのがいいかなと。

谷川
ほとんど短く答えなきゃいけないんですか。
いや、どっちでもいいですよ。大丈夫です。ライ

ズ感を大事にしたいということでしたから、これはあらかじめお伝えしていなかったんですね。まず、意見票の中から出てきた意見として、「詩を紡ぐ上で大切にすることは何ですか」。

谷川
「詩を紡ぐ」という言葉をみんな使うんだけど、

ちよつとそれには違和感があるんですね。「紡ぐ」というのは、なんか糸にすることでしょう？

宮崎
テキスタイルでもありますね。

谷川
「織る」というほうがまだ近いみたい。詩は織るものじゃないかなと思いますけどね。

何を大切にしているか。やっぱり人が何かを感じてくれるだろうかということが一番大事ですね。僕は簡単に受け狙いと言っちゃうんですけど。受け狙いというと、なんかお笑い番組みたいなことになっちゃうんだけど、なんかの形で自分が書いた言葉、発した言葉に反応してもらえることが一番大事。だから、常に自分の中の他者というものを意識的に考えてるところがありますね。

宮崎
さっきのお話の受信と発信の両方を想定してやっていらつしやるということですよ。ご自分の

中ではね。

谷川
そうですね。

宮崎
聞き手と話し手がいつも……。最新作の『あたし

とあなた』はまさに……

谷川
あれはちよつとね、もうちよつと軽みがあるんですけどね。

宮崎
でも、そんな感じですよ。

谷川
これも面白い質問なんですが、「谷川さんは詩が絵本や合唱になつてることが多い」ですよ？

谷川
ちよつとそれは一緒くたにできないんです。

谷川
絵本の場合には、創作絵本の場合には絵本のテキストとして書いていて、詩としては書いてないんです。

宮崎
なるほど。

谷川
僕が書いた詩を絵描きさんが絵本にしてくれることもあるんですけどね。

宮崎
合唱曲は、僕が既に合唱を考えずに書いた、いわゆる現代詩の世界の詩を作曲家が面白く思つてくれて作曲されたものが圧倒的に多いので。

宮崎
後で音楽をつけていかれたということですね。

谷川
合唱曲を最初から依頼される場合には、やっぱり

合唱というものの機能というのかな？

谷川
一番の問題は、今はそれが少なくなつたんだけれども、合唱で歌われると言葉が聞き取れない発声法がすごく多かつたんですよ。今、それがだんだんよくなつてきて、結構聞こえるようになってんですけどね。

宮崎
もう一つ、合唱というのはみんなが声をそろえちゃうわけでしょ？ もちろんそういう生理の違いはあるにしても。それはやっぱり全体主義に通じるということで、僕は常に合唱にはある距離をおいてたところあるんですね。全体主義的に画一的に同じ声で同じ言葉でみんなが声をそろえるんじゃないくて、合唱ライブのなんか違うものを作りたいというふうにして書いてましたね。

宮崎
ポリフォニックな感じでね。

谷川
そうですね。

宮崎
今の話はすぐ共感できまして、実は詩の朗読に関わるんですけど、うちの学生たちもたくさん教育実習に行ったりするんですが、詩の授業のとき

に、先生の後についてみんなで一斉にそのリズムで読ませるといのは、それは先生の呼吸であり、先生の思想なんです。そこにみんなが合わせていってしまうことに、なにか恐ろしさを感じるんです。

谷川 すごい困るんですよ、あれ。

宮崎 だから、群読はやめたほうがいいよという話をしてるんですけどね。

谷川 群読は演出家がちゃんといればいいんです。だけど、一斉に声を合わせて読む斉読。斉読はやめてほしい。

宮崎 ああ、そう、斉読ですね。

谷川 七五調の詩だったら、斉読がある程度成り立つんだけれども、全体のテキストの質を考えずに斉読させる先生がいるから。そうすると、詩が死んじゃいますよね。

宮崎 私もあれはほんとに恐ろしいことだなと思って。

同じ呼吸で読んでいってしまうので。

谷川 日本語は、声に出せば、どうしても当然なんか七五調の呼吸みたいになっちゃうんですよ。それ

宮崎

が生きる詩と、全然それじゃあ困っちゃう詩とあることを先生は知ってほしいと思いますけどね。今、全体主義とおっしゃったところ、私もよく思えますね。

谷川

あと、「写真と詩の関係について」。写真部四年生とちゃんと名乗ってこられた方があって。「写真家と詩人の相違点、共通点はどうなんでしょうか」。谷川さん自身もお写真を撮られますよね？

写真というのはほとんどつまり、一瞬にして固定するわけですね。ある外部の情景を。

詩というのも僕は瞬間芸だと言ってるんですよ。散文はちゃんと時間に沿って、あるいは歴史に沿って展開していくものなんだけど、詩はどっかで止めちゃうんですよ。だから、僕は時間とか歴史の切断面を見せるのが詩だとよく言うんです。

そういう点で写真とはすごく相性がよくて、僕が自分で撮るのはやっぱり詩とどっか共通なものがあるからだと思いますね。

宮崎

瞬間を切り取る感じなんですね。

熊野純彦さんという哲学者が、「哲学者は詩人であり得るか」ということを書いていらっしやるんです。無理だそうなんです。

谷川

どうして？

宮崎

なぜかという、詩人というのは、目の前に川が流れていて、この水をパツと一すくいにすくうことが出来るんだけど、それは瞬間ですよ？

詩人はそれを「永遠」とすることが出来ますが、哲学者というのは、そういった切り取り方はできない。あくまでも時間のながれのなかで「永遠」を考えるのだそうです。一すくいでもって、これを「永遠」ですと差し出すことはできない、ですから結論としてそうはならないと。

谷川

そういうたとえば、そうなりますね。

宮崎

今のお話もまさにそこですよ。パツとすくえるかどうかというところですね。ありがとうございます。

あとは、ファンレターみたいなものも来てまして、八歳のお子さんを持つヒロミさんという女の

谷川

方からです。谷川さんのブログで、携帯ですつと詩が流れていくというのがあるんですね？

宮崎

ええ。アプリです「谷川」という詩を釣るアプリ。

谷川

その八歳のお子さんがあれをこよなく愛しておられるようで。

宮崎

谷川さんがお体の具合が悪いというようなことがブログで分かると、自分が寝込んだぐらいふさぎ込むんだそうですよ。

谷川

え？ その子が？

宮崎

そうらしいですよ。

谷川

すごい。

宮崎

すごい共感しますよね。

谷川

僕が子どもだったら、将来お嫁さんにするんだけどね。(笑)

宮崎

女の子だったらいいですけど。

谷川

男の子なの？

宮崎

分かんないです。(笑)でも、男の子でもかわいいですけどね。

あと、「人生の楽しみは何ですか」と聞いてきた人がいました。

谷川
すごいね。

宮崎
どうでしょう？ お答えいただけます？（笑）

谷川
人生の楽しみ？

宮崎
楽しみは何ですか。

谷川
いっぱいあるんじゃないですか、みんな。

宮崎
谷川さんは？

谷川
僕は寝ることですね。（笑）

宮崎
素晴らしいですね。

谷川
僕は不眠症を知らない人間で、寝る頃になるとうれしくてボタンキューと寝ちゃって、朝ちゃんと目が覚めるということ割合長い間続けてるんですよ。寝るのはすごく好きですね。

宮崎
いいですね。北川透さんという詩人がいらつしゃる。あの人も寝ることが好きだ、好きだと。どうしてなんですかね？

谷川
詩人で不眠症てのはいいいますけどね。

宮崎
いますよね？ むしろそちらのほうが……。荒地

派なんか、みんなそうですよね？

谷川
どっちかといえば、そっちが多いかな？

宮崎
眠らないですもんね。

谷川
今、一日一食なんです。晩ご飯しか食べないのね。だから、晩ご飯が近づいてくるとすごい楽しみですね。（笑）

宮崎
わくわく。

谷川
はい。何食べてもおいしいから、全然美食が分かんなくなってきたんですよ。何が美食か。

宮崎
もうすぐ夕方ですね。だんだんテンションが上がって……

谷川
まだ大丈夫です。（笑）

宮崎
まだ大丈夫ですか。

谷川
じゃ、ちょうど時間になりましたので、最後にこの質問に答えていただいて、残念ながら、谷川さんとお別れなんですけど。

宮崎
え？ そんな質問があるんですか。

谷川
すごくいい質問を図書館の見票で出してくれた子がいたんです。「谷川さんは友人と別れるときの

の帰り際の挨拶は何が好きですか」。それを皆さんに言っていたら、おしまいということにし

ましようか。

谷川 やつぱり「じゃあね」が多いかな? 「じゃあ

ね」という詩も書いてるし、それをすごくいい歌にしてくれてる作曲家もいるんですよ。

やつぱり「さようなら」というふうにあんまり言いたくないんですね。また会えるということがどつかにあつたほうがいいからね。

宮崎 そうですね。この子も「またね」というのが好きだよ。

谷川 「またね」もいいけどね。でも、また会いたくない人には言いたくないです。(笑)

宮崎 言っちゃだめですよ。

谷川 だから、「じゃあね」が無難。(笑)

宮崎 無難ですね。大人の挨拶ですね。

じゃあ、ここにいらつしやる皆さんに谷川さんから……

谷川 こんな多人数を相手に「じゃあね」と言うの間が抜けてますよ。(笑)

宮崎 じゃあ、何か最後に感想を言っていたいで、それでおしまいにしようかなと思います。

谷川 すごくいい大学だと思いましたね。今、お話し

して。

宮崎 ありがとうございます。

谷川 僕、大学にこういうふうに呼ばれることあるんだけど、今日みたいに生き生きした対話になかなかならない。

宮崎 ほんとですか。

谷川 それに、学生たちがそこまでいろんな意見を言うてくれるという経験も少ないんですよ。楽しませていただきます。

宮崎 ありがとうございます。

谷川 ありがとうございます。いい子たちですよ、みんな。

谷川 そうですか。(笑)

宮崎 さんにもいろいろ聞いてもらって、ありがとうございます。



さいました。

宮崎

いえいえ、私などは谷川さんにお会いできるというので、実は「とんでもないこと」みたいになつてたんですよ。五月の連休明けぐらいは、もう穏やかじゃなくなってきたね。でも、昨日辺りからだんだん落ち着いてきた感じですね。

谷川

あ、ほんと。

宮崎

でも、周りの人にそう言っても、全然そんなふうに見えないと言われて、損な性分だとつくづく思いました今回のこの講演会でございました。

本当にありがとうございます。

谷川

どうもありがとうございます。(拍手)

宮崎

拍手でお送りください。(拍手)

(二〇一六年六月四日)

愛知県立大学長久手キャンパス講堂にて

協力 テープ起こし専門 MayStation)